

道徳教育における〈人との関わり〉についての一考察

—ポストコロナにおける接触と非接触のオルタナティブ—

今井伸和

A study of “relationships with others” in moral education: Alternatives to contact and non-contact in post-COVID-19

Nobukazu Imai

(Received September 30, 2021)

はじめに

本稿は、筆者の本務校における教職大学院での2021年度前学期科目「道徳教育と生徒指導」の講義をもとにしている。初回の講義で、履修者から、道徳教育や生徒指導の観点から見た子どもと教員の人間関係について関心がある、との発言があったこと、くわえて、本講義が始まった2021年4月は、新型コロナウイルスが猖獗をきわめてから1年ほどが経過したが、いまだに収束の見通しが立っていないことから、本講義では、パンデミックを経験しているさなかに、人間関係はどのように変化するのか、あるいはまた変化しないのか、という問題について考えた次第である。

感染拡大により、外出自粛や「3つの密（密閉・密集・密接）」の回避が求められた¹。学校では全国臨時一斉休校が政府から要請された。外に対する密が避けられれば避けられるほど、こんどは内に対する緊密の度合いが増す。そうすると、自ずと家庭内の緊張状態は増大することになる。その結果、児童虐待やDVの件数が2020年は増加したのである。具体的には、2020年は児童虐待通告が初めて10万人を超え、DVも過去最多になった。

警察庁は4日、昨年1年間の犯罪情勢統計（暫定値）を発表した。児童虐待の疑いがあるとして、全国の警察が児童相談所（児相）に通告した18歳未満の子どもは前年比8・9%増の10万6960人に上り、統計を取り始めた2004年以降、初めて10万人を超えた。DV（配偶者や恋人からの暴力）の相談や通報も、過去最多の8万2641件に上った。新型コロナウイルスの感染拡大で在宅時間が延びたことが増加の一因となっている可能性がある²。

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』には、次のように文章がある。「〔家庭は安心できる場所、子どもを守り育てる教育の場所であるが、〕しかし家庭は、人間関係の緊密さなどを発端として生じるいさかいやトラブルなどによって、子どもがゆがめられる危険性が潜む場所でもある。³」つまり、新型コロナウイルスの感染拡大により、この潜在的な危険性が現実のものとなったと言える。また、文部科学省『生活指導提要』では、「児童生徒が持つ課題の背景」の一つに、「児童虐待・家庭内暴力・家庭内不和・経済的困難などの家庭の問題がある」とされている⁴。だとすると、ポストコロナにおいて、問題行動や悩みを抱えている児童生徒、特別な支援を必要とする児童生徒が増大していることが予想される。

文科省の言うとおりに、家庭は子どもにとって安心できる場所になることもできれば、その緊密さのために、子どもがゆがめられる危険な場所ともなりうる。では、このジレンマはいかに解決できるのであろう。われわれが3密を回避し社会的距離を確保することはこれからしばらくは続くであろう。それがあと数年続くという専門家もいるくらいである⁵。他者との接触を避けつつ、しかも家族内において緊密にならずに済ませることは可能なのであろうか。

そこで本稿では、ポストコロナにおいていかなる人間関係が可能かという問題を考察する。われわれは目下、社会的距離の確保が要請され、他者との接触を極力回避する生活をしている。ポストコロナにおける人間関係の難しさは、われわれは接触することも回避せねばならないし、その一方で、接触しないことによって、われわれは人間関係における無くてはならない大切なものが剥奪されているような気分になっていたりしているところにある。さらには、家族とのみ接触し、外部へと開かれない現在の生活は、後に見るように、自殺や

うつ病の原因にもなっているようだ。では、どうすればいいのか。われわれは、ポストコロナにおいて、どのような人間関係を構築すればいいのであろう。いくつかの知見を参考に、本稿で考察していこう。

論述の順序は以下のとおりである。まず第1章で、パンデミックが子どもや女性に与える影響について、私的な研究会での議論をもとに考察している。ウイルスの感染拡大により、現実にはどのような問題が起こっているのか、問題はいかに解決すべきなのか。ここでは愛着理論を取り上げているが、それでは問題の解決にならないことを明らかにする。次に、聖書における「我に触れるな」という言葉を足がかりに、非接触の問題点について考察している。第3章では、接触でも非接触でもない第三のふるまい方について考察する。最後に、ポール・オースター『ガラスの街』をアレゴリーとして取り上げ、接触と非接触とのオルタナティブを探究する。

1. 子どもや女性への影響

(1) 児童虐待やDV等の増加

すでに見たように、感染症の拡大により最も影響を受けるのは、子どもや女性である。そのことは様々なデータで示されている。女性への影響のほうから見ていこう。内閣府男女共同参画局の報告によれば、2020年度（同年4月から翌年2月まで）DV相談件数が増加し、前年同期比は1.5倍であった⁶。DV相談件数の増加と感染症拡大との関連について、同報告では次のように述べてられている。「現在、コロナ下の生活不安やストレス、外出自粛による在宅時間の増加等によりDV相談件数が増加しており、女性に対する暴力の増加や深刻化が懸念されている。⁷」具体的な相談内容としては、緊急事態宣言中はパートナーが家にいて暴力が激しくなったという相談や、パートナーが給付金を渡してくれない、あるいは浪費してしまったという相談が寄せられたという⁸。

そして、女性の自殺者も増加している。2020年の女性の自殺者は7026人であり、前年比で935名、13.3%の増加である——それに対して男性は14055人で23名の減少である⁹。同報告では、女性の自殺の背景には様々な原因（経済生活問題や勤務問題、DV被害等）があるとしながらも、コロナの影響でこうした問題が深刻化しており、それが自殺者数増加に影響を与えている可能性があるとしている¹⁰。

次に子どもへの影響はどうか。児童虐待については、2020年、児相への通告児童数がはじめて10万人を超えた¹¹。また、コロナ下でうつ症状を抱える子どもが増加しているというデータがある。国立成育医療研究

センターは、コロナ下の影響が慢性化してきた現在、日本の子ども全体を表しているわけではないと断りつつも、小学4年生から6年生の15%、中学生の24%、高校生の30%に中程度以上のうつ症状があるという¹²。一方、保護者にも中程度以上のうつ症状が3割あったとされる。

いったいコロナ下で何が起きているのだろうか。どうしてDV、女性の自殺者、児童虐待、子どものうつ症状がコロナ下で増加したのであろう。小野田貴夫は、私的な研究会での発表において、コロナ下での児童虐待や女性自殺者、うつ症状の増加の理由について、次のように述べている。すなわち、コロナ下では、第一に、家族内関係が過密状態になる。これは過度の依存を引き起こし、DV相談件数や児童虐待が増加する。第二に、家族外関係が過疎状態となり、DVや虐待の避難先が失われる。そうすると、それは女性自殺者の増加の要因になりうる。第三に、外出自粛による感覚遮断状態は不安が自己増殖し、たとえば子どものうつ症状が増加する。

小野田の指摘が正しければ——実際正しいであろう——、ソーシャルディスタンスで感染拡大は阻止できても、それだけでは子どもや女性は救われない。では、どうすればいいのか。一つの考え方は、われわれは接触を喪失したのであるから、もう一度接触を回復すべきだ、というものである。たとえば、コロナ下で、ポウルビイの言うような愛着（近接性の維持、安全な避難所、分離不安、安全基地）を取り戻そう、というものである¹³。はたして、この考え方は妥当なのだろうか。

(2) 愛着理論

率直に言って、愛着理論では児童虐待やDVに至る家族内関係の過密状態を救えないであろう。なぜなら、児童虐待やDVが行われる家族には、コロナ下ではますます過剰な「近接性」が維持されればされるほど、その一方で「安全な避難所」・「安全基地」としての愛着は失われるからである。かりに、それらの家族に、児童虐待やDVに至る過程で愛着が多少なりともあったにしても、すでに児童虐待やDVが起こっている状況で、愛着理論を持ち出したところで期待される効果はない。また、愛着理論では家族外関係の過疎状態も救えない。それもそのはず、それは家族（の愛着）ではないのだから。最後に、いずれにしても（外出自粛による）感覚遮断状態に変化はなく、不安の自己増殖、子どものうつ症状も、愛着理論ではよくならないであろう。

周知のとおり、ポウルビイは、乳幼児期に母親（代理を含む）による十分な配慮がなされなかった場合、

子どもの人格形成に深刻な影響を与えるという「母性剥奪」論を展開したわけだが、しかし他方で、彼の愛着理論は、たとえば「3歳児神話」のように、女性を育児に縛りつけるイデオロギー的な作用を中心に多くの批判がなされてきた¹⁴。そうだとすると、愛着理論のような、女性の社会参画を阻んでいるイデオロギーがコロナ下において女性をますます厳しい状態に追い込んでいるとも言える。内閣府男女共同参画局の報告を今一度参照しよう。コロナ下において就労や生活において最も影響を受けるのは、女性である。たとえば、女性が多くを占めている非正規労働者の雇用が失われたこと、ひとり親、単身女性、非正規労働者等の女性への影響が厳しい形で表れていること、テレワークが一定程度普及した反面、無償ケアの責任が大きく女性にのしかかり、女性の生活、就業面に大きな影響を与えていること、などである¹⁵。要するに、愛着理論は、コロナ下で苦しむ女性や子どもにとって、処方箋となるよりはむしろ、女性や子どもを窮地に追い込んでいく張本人と見なすべきかもしれない。

愛着理論とは接触をことさら強調することであるが、今度は接触とは反対の方向について考えてみよう。すなわち、非接触についてである。コロナ下においてわれわれは接触をできるだけ回避しなければならない。その方向で解決の糸口は見つかるのだろうか。

2. 非接触型の愛は可能か

(1) ノリ・メ・タンゲレ（我に触れるな）

スラヴォイ・ジジエクが『パンデミック』という書名で緊急出版した著書において、ヨハネによる福音書20章17節の「我に触れるな」(Noli me tangere)について言及している¹⁶。これは、キリストの復活の際に、イエスに近づこうとしたマグダラのマリアに対して、イエスが言った言葉である。どうしてイエスは「我に触れるな」と言ったのか。さしあたりの答えはこうである。すなわち、「キリストは、信者の間に愛がある時には、いつも自分はそこにいると答えた。触れることのできる人としてではなく、人々の間の愛や連帯の絆として存在する。¹⁷」つまり、イエスが個別の接触可能な身体として存在するのではなく、信仰があるところにはどこでも普く遍在する普遍的な身体として、もはや身体であることも必要ないものとして、キリストが存在する、というのが「我に触れるな」の趣旨だとされる。

そのことと新型コロナウイルスとどう関係があるのか。ジジエクが言いたいことは、非接触において精神的な近接の契機が得られるということである。

両手を伸ばしても相手に届かない、お互いにアプローチできるのは、「内」からのみである。そして、その「内」に対する窓は我々の目である。今日、親しい人（あるいは見ず知らずの人でも）との出会い、適度な距離を置いて向かい合う時、相手の目を深く見つめることで、直接触れ合うこと以上に心を開くことができるのだ¹⁸。

目を見つめることすらできない場合もある。たとえば、熊本県に住んでいる筆者は、2020年も2021年も、自分の親（京都府在住）や妻の親（佐賀県在住）のもとに帰省していない。それは、勤務先から「県外への不要不急の移動」を控えるように言われているからではない。それは、高齢の親にウイルスを感染させないためである。これまでは毎年帰省することが親を大切にすることであったが、ポストコロナでは、親と接触しないことが、親を大切にすることになるのである。

愛着理論のように接触が近接の契機であるとする単純な考え方よりも、非接触が精神的な近接の契機であるとする考え方のほうが幽遠な趣はたしかにある。しかし、これがポストコロナにおける一般的な関わり方になるのだろうか。たとえば、ふつうは愛するために接触するわけだが、愛するがゆえに接触しないというのがこれからの人との関わり方になるのだろうか。

(2) 非接触型の生活様式はディストピアではないか

大澤真幸によれば、イエスが神の国が近づいたことを人々に実感させるのは、イエスが実行する数々の奇蹟であり、その中心はイエスが病人に触れることによって、その病を癒やすことである¹⁹。たとえば、イエスは重篤な皮膚病を患っている人を癒やしたり（マルコ1章40-42節）、目が見えない人の目を見えるようにしたりする（マタイ9章27-30節）。それどころか、イエスは死んだ娘を生き返らせたりもする（マタイ9章18-19節および23-25節）。これらの奇蹟はすべてイエスが患者の患部や死者の手に触れることによって可能となる。つまり、触れないためには、触れることが先行しなければならなかったのである。

確かに、磔刑死の後の復活に際して、イエスは言う。もはや私に触れる必要はない、触れてはならない、と。触れなくても——というより触れえないことによって——、神の遍在は保証されよう。しかし、それが可能なのは、その前に、触れる体験、触れ合う体験があったからだ。〔…引用者による中略…〕すると今度は、私たちは、「新しい生活様式」への批判的な示唆を得ることになる。「ノリ・メ・タンゲレ」だけでは足りない。触れること、近くにある

ことは、排除することはできないし、排除すべきではない、と²⁰。

大澤の言うとおりに、接触到諸悪の根源を見る新しい生活様式はディストピアであろう²¹。それは、仕事も会議も大学の講義も、講演会やシンポジウム、映画もコンサートも、すべてオンラインで済むような社会である。たしかに、オンラインのほうが効率的な仕事や会議もあるであろう。かといって、さすがに恋愛はオンラインで済ますことはできない。愛する他者の身体に直に触れることに恋愛の喜びがあるからである。触れ合うことが忌避される社会では、そのような喜びは得られない。

だがしかし、「触れないためには、触れることが先行しなければならない」ということを一般化していいものだろうか。むしろ、一般的な人と人との関わりにおいては、その逆、つまり触れるために、触れないことが先行しているのではあるまいか。この命題を証左するひとつの事実を紹介しよう。それは、チンパンジー研究の世界的権威である松沢哲郎が、人間固有の特性として明らかにしたこと、すなわち、人間の赤ちゃんは、ほかの動物（たとえばチンパンジー等の大型類人猿）と違って、仰向けに寝かせて、安定していられるという事実である²²。

仰向け寝ができると、それでどうなるというのか。人間の赤ちゃんは、仰向けなることによって、見つめ見つめられることが増大する。ニホンザルの赤ちゃんは母ザルと密着しているため、見つめ合わない。チンパンジーは、母親が「高い、高い」のような動作をして、時に見つめ合うことがあるが、見つめ合うことはほとんどまれであるようだ。仰向けになることによる第二の効果は、夜泣きである。チンパンジーの赤ちゃんは夜泣きをしない。母親がすぐそばにいるからである。人間の赤ちゃんだけが夜泣きをする。母と子が離れているからだ。大澤は、その泣き声やがては言葉に置き換わると推測している²³。

大澤は、松沢を承けて、自著でこう述べている。

人間は、他者から離れることにおいて、他者に近づくのである²⁴。

ここで注意しなければならないのは、接触・非接触のダイコトミーのうち、単純に一方を退け、他方を選択するというような単純な話ではない、ということだ。重要なのは、われわれ人間は、仰向け寝が可能になることによって、距離を前提にした視線という接触、つまり非接触の可能性を得た、ということである。そうだとすると、むしろ逆に、人間において普遍的なのは、

接触するために、非接触が先行しているということである。われわれが他者と近接するためには、その根拠として他者と隔離していなければならないからである。

(3) 接触でも非接触でもないディスコミュニケーション

われわれの問題はこうであった。すなわち、コロナ下において児童虐待やDV、子どものうつ症状が増えており、問題解決には愛着理論では十分でないとわかったが、かといって、非接触型の愛もディストピアであり、われわれは一体どうすればいいのか、というものである。

ここで、鶴見俊輔の「ディスコミュニケーション」についてふれよう。この概念によって、鶴見は、コミュニケーションでも非コミュニケーションでもない、それらに回収されないような考え方を示唆しているからである。鶴見は「ディスコミュニケーション」について以下のように述べる。

コミュニケーションは、コミュニケーションとディスコミュニケーションとの二重の性格をもつものとして、Communication-dis-communicationとして理解さるべきだ。コミュニケーションの分析は、同時に、そのコミュニケーションによって意味が通じなかった部分についての分析をふくむものでなければ、十分でない。各回のコミュニケーションのそれぞれに対応して、それ相当のディスコミュニケーションが計測されねばならぬ²⁵。

われわれのこれまでの議論と関連づけて言えば、「ディスコミュニケーション」が非接触に対応し、「コミュニケーション」が接触に対応すると考えたい。鶴見の言う「ディスコミュニケーション」はそれに尽きない。なぜなら、鶴見が上の引用で述べているとおり、(広義の)コミュニケーション自体が(狭義の)コミュニケーションとディスコミュニケーションというふたつの要素で構成され、(狭義の)コミュニケーションもディスコミュニケーションも、いずれも(広義の)コミュニケーションを支える一契機だからである。

たとえば、(狭義の)コミュニケーション能力が高い腕利きセールスマンが恋人に、自分がどれだけその恋人を愛しているかを営業トークよろしく流暢に語っているところを想像すればわかりやすい。おそらく、その恋人に愛は伝わらないであろう。むしろ、あなたを愛しているという感情はいくら言葉を尽くしてみたところで言葉にならない、その言葉にならないような感情、「言葉によって切り捨てられてきたもの」²⁶、それらを、矛盾した言い方になるが、朴訥と言葉にす

るほうが、愛が相手に伝わるであろう。

だとすると、ディスコミュニケーションはコミュニケーションの根拠（のひとつ）であると言うほかあるまい。重要なのはコミュニケーションとディスコミュニケーションの二者択一ではない。むしろ、コミュニケーションでは汲みつくされないディスコミュニケーションの可能性が重要なのである。鶴見はディスコミュニケーションの可能性について次のように言う。

ディスコミュニケーション（あるいは、コミュニケーションのない状態）は、しばしば、思索の跳躍を助ける。科学においても、芸術においても、その最前線にたつ仕事は、通信可能物（communicables）の領域をひろげて行くと同時に、それに呼応してもややと心の中にわき自己じしんにしか通用せぬ新来の私的記号（personal symbols）をふやすことによって、通信不能物（incommunicables）の領域をひろげて行く。これら二つの領域のあいだのダイナミックな相互作用が、人間の思索におけるもっとも重大なきっかけをつくるのである²⁷。

ディスコミュニケーションは、コミュニケーションの不能・無能ではない。むしろ、こう言ったほうが正確かもしれない。すなわち、コミュニケーションの不能・無能であるディスコミュニケーションが（広義の・高次の）コミュニケーションを可能にする、と、この、（狭義の／低次の）コミュニケーション＋ディスコミュニケーション→（広義の／高次の）コミュニケーションという図式が、接触と非接触の二者択一に回収されないようなオルタナティブを考える参照点になるのではないだろうか。そこで次章では、ディスコミュニケーションの具体例として、薬物依存症やDV被害者の回復支援を取り上げたい。

3. 接触型でも非接触型でもないふるまい方

(1) 痛み随伴性サポートと社会的サポート

くり返せば、今われわれが直面している人間関係の困難さは、一方で接触することを回避せねばならないが、他方で接触することを回避する世界は空疎であり、そのいずれか一方だけを選択することができないところにある。そこで、本章では接触型でも非接触型でもない第3の立場について考えてみよう。以下でダルク（薬物依存症回復支援施設）の活動を取り上げるのは、そこに、接触でもなく非接触でもない第3のふるまい方についてのヒントがあるように見受けられるからである。さらに言えば、ダルクの支援は鶴見の「ディスコミュニケーション」に通底していると考えられる。

それでは見ていこう。

ダルクの支援プログラムのひとつにミーティングがある。そこで当事者は互いに自分のことを語り、その語りを傾聴する。そのミーティングで重視されるのが、「言いつばなし、聞きつばなし」というふるまい方である。医師の熊谷晋一郎がその標語を次のように説明している。

各々自分の痛みの経験について語るのですが、〔…引用者による中略…〕それに対して周りは一切応答しないのですね。随伴的な応答はしない。誰かの表現に対して、頷きもしないし、目も合わせない²⁸。

常識的には、相手の目を見て話すこと、相手の話に相づちを打つことがマナーとされる。なぜダルクではあえて応答しないのだろうか。それは、他者が簡単に理解できるには、ダルクのそれぞれの当事者が経験したことは苛烈を極めるからであり、それに応答できるとすることは思い上がった態度となるからである。だから、ダルクのミーティングでは、一般のミーティングとは異なり、応答できないこと、ディスコミュニケーションであることが前提となる（＝応答不可能性）。もっとも、応答できないからといって全く応答しないわけでもない。応答できないという仕方では応答するのだ。すなわち、それぞれの語りをそばにいて静かに傾聴する（＝応答不可能性における応答可能性）。

この応答不可能性における応答可能性に関して、熊谷自身の慢性疼痛の経験が興味深い。痛みは一般的に原因があり、その原因を取り除けば痛みが消える（＝急性疼痛）が、それとは異なり、過去の痛みの記憶が、神経の中に記憶、痕跡として残ってしまっていて、それが過去の記憶として成仏せずに、そのつどフラッシュバックのように現在の記憶として思い起こされているという痛みがある²⁹。このような痛みは、急性疼痛に対して、慢性疼痛と呼ばれる。この慢性疼痛とダルクの「言いつばなし、聞きつばなし」とどう関係があるというのか。慢性疼痛をサポートする仕方もまた「言いつばなし、聞きつばなし」の形式を取るのである。

熊谷によれば、慢性疼痛には二種類のサポートの仕方があって、「痛み随伴性サポート」と「社会的サポート」とである³⁰。前者は「痛んでいる相手に共感して痛みを取り除いてあげようという形で」行うサポートであり、後者は、痛みへの共感はさておき、痛みとは関係ない部分をサポートする。たとえば、社会復帰のための手立てを講じるとか、からだが不自由であれば介助するとか、である。一見「痛み随伴性サポート」のほうが良さそうな気もするが、慢性疼痛に効果があるのは「社会的サポート」のほうなのだ。どうして「社

会的サポート」のほうがうまくいき、「痛み随伴性サポート」ではうまくいかないのか。

痛み随伴性サポートだと「私はあなたの痛みがよくわかります」という仕方での痛みにかかわるが、それはまやかしである。その痛みは他者に固有の痛みであるからだ。しかしその一方で、他者の固有の痛みはどうせわからないと開き直ってみてたところで致し方あるまい。社会的サポートは、他者の痛みはほんとうは分からないと認めつつも、他者を放っておかずにその回復に専念するというふるまい方である。要するに、社会的サポートは接触型でも非接触型でもない第三のふるまい方を示唆しているのである。

児童虐待やDVという傷を負った子どもや女性にも、社会的サポートが有効ではないだろうか。つまり、彼らの痛み随伴する（＝接触型）のでもなく、ほったらかしにする（＝非接触）のでもなく、距離を取りつつ他者の回復を祈念するというふるまい方である。では、ダルクにおける「社会的サポート」はどのようなものなのであろう。次に、ダルク女性ハウスの支援の仕方を見てみたい。

(2) ダルク女性ハウス

ダルク女性ハウスの施設長、上岡陽江は、当事者と支援者との関係性について、「ニコイチ」にならないように注意すべきだと述べている。前節の慢性疼痛との関連で言うと、「ニコイチ」は「痛み随伴性サポート」のバリエーションである。つまり、「ニコイチ」とは、自己と他者が、別々の個体であるにもかかわらず、一つの個体のように、自己と他者の境界線があいまいになり、過剰に密になるような状態である。DVもこの「ニコイチ」が引き起こすと上岡は考えている。

実は、ニコイチとDVは表裏一体です。〔…引用者による中略…〕相手と自分とのあいだに境界線がないときに暴力が出てきます³¹。

上岡によれば、ダルク女性ハウスの当事者は、家族のなかに問題があった例が多く、それはたとえば、父のアルコール依存症や暴力、両親の不和という問題だ³²。幼いときからこうした家族のあいだで育つと、子どもは、家族の問題を自分のせいだと感じ、自分の責任の範囲を超えているにもかかわらず、その家族の緊張感を子どもが背負ってしまう³³。そうすると、しだにお父さんとお母さんの痛みを感じるようになり、それが自分の痛みなのか、お父さんやお母さんの痛みなのか分からなくなる、という³⁴。上岡はそれを「境界線が壊されて育つ」と呼んでいる³⁵。境界線が壊されて育った子どもは大人になるとどうなるのか。上岡に

よれば、「危ない男の人」のところに行ってしまうことがよくあり、「この人、いつも大変な目にあっているから、私が支えなきゃ」となったり、ヤクザが警察にクルマを止められて職務質問されているのを見て、「助けなきゃ」と思って首を突っ込んだりするらしい³⁶。彼女らがそのような度外れの行動をとってしまうのは、自己と他者との境界線がなく、ニコイチだからである。

このニコイチの関係、境界線がない関係は過度に共感している状態である。ダルクの支援が「共感」（＝痛み随伴性サポート）ではうまくいかないことはすでに述べた。ダルク女性ハウスのサポートでは、共感ではなく、共感の不可能性が重視される。

「もしかしたらテレパシーで伝えられるのではないかって思っているかもしれないけど、そうじゃないよ」と、ことあるごとに〔援助者が当人に〕言う。……わかんないよって³⁷。

このように、ダルク女性ハウスの支援は、いったん壊れた境界線を意識させ、境界線をもう一度当事者に取り戻させることである。そして、ダルク女性ハウスでの支援の仕方は、共感が否定されるのだから、痛み随伴性サポートではなく、社会的サポートとなる。

「〇〇さんとの関係が悪いんだけど、どうしたらいいんだろう」と相談を受けるとします。私〔＝上岡〕は「〇〇さんとの関係はもういいから、とにかくあなたは寝なさい。ここのところ忙しすぎて休んでないんじゃない?」と言ったりします。そんなこと言われたら「えっ?!」とムカついたりする。でも、言われたとおりに休んでみたら、結局は状況がよくなった。問題はそっちじゃなかった、とあとから気づく³⁸。

以上見たように、ダルク女性ハウスでは、当事者に自己と他者の距離を意識させつつ、当事者をいたわるような支援を行っている。自己と他者の距離を意識させることは、われわれの議論においては、単純な接触の否定を意味している。また、他者の回復を祈念している点では、単純な非接触をも否定している。その支援とは、他者との境界線を無視して共感することではない。かといっても、もちろんほったらかしにするのでもない。密でも隔絶でも、接触でも非接触でもなく、その支援はそれらの中間の領域に位置している。したがって、ダルク女性ハウスの支援は、コロナ下において、児童虐待やDVという傷を被った子どもや女性への支援として、参考になるものと思われる。

(3) 孤独から抜け出すための祈り

もうひとつ別の知見を挙げてみたい。DV被害者に精神科医としてかかわってきた宮地尚子の〈祈り〉の概念である。

とくにわたしが多くかかわってきたドメスティック・バイオレンス(DV)の被害者は、関係の最も深い他者から、暴力やおとしめによって長期間自分の価値や能力を否定されてきた。そのマインドコントロールの罟と、長いあいだ追いやられてきた孤独の闇から抜け出すには、自分の幸せを祈ってくれる「だれか」がかならず必要である³⁹。

宮地は、DV被害者が回復するためには、「自分の幸せを祈ってくれる」第三者が必要であるという。宮地の言う〈祈り〉が接触型でも非接触型でもない関係の仕方を示唆している。まず、〈祈り〉とは接触しないものである。宮地は、親しい女友だちがその最愛の伴侶を失ったお葬式で、喪主をつとめる女友だちの姿を見つめながら、次のように述懐している。すなわち、「なにもできなくても、見ていなければいけない〔…引用者による中略…〕なにもできなくても、みているだけでいい。なにもできなくても、そこにいるだけでいい」と⁴⁰。かといって、〈祈り〉とは、まったく関係しないのでもない。宮地によれば、〈祈り〉とは、喪失は簡単には埋まらないだろうけれど、見ているしかできないけれど、ずっと見ていること、彼女の姿を「目撃し、いまこの時が存在したことの証人となる」こと、である⁴¹。このように、〈祈り〉とは、関係から逃げようとするわけでもないし、相手のかかえる問題を背負い込むわけでもない。それは、接触の不可能性における接触の可能性なのである。

それにしても、どうしてDV被害者に対する関係の仕方が〈祈り〉であるのか。おそらくそれは、DV被害者が世界からの絶対的な隔絶を経験し、それを支援する者は、その隔絶を前提にせざるをえないからである。DVであれ児童虐待であれ、それらが起こる場所は、最も濃厚に接触している密の関係性において、つまり家族においてである。近い関係における関係の断絶(=暴力)は、絶対的な隔絶にほかならない。宮地によれば、DV被害者には、被害者が直接的な暴力から逃れても、世界との絶対的な隔絶はそのまま残されるという。

DV被害者は、配偶者から離れ、暴力から逃れられれば、それで幸せになれるというわけではない。被害者の自立とは、大きな喪失の過程でもある。いままでの生活世界、人とのつながり、温かい家庭を

築くという夢、子どもの教育、老後の人生設計、愛や親密性をはぐくむ自信、世界は安全だという基本的信頼感。それらが全て奪われる⁴²。

その場合、当然ながら痛み随伴性サポートではうまくいかない。なぜなら、痛み随伴性サポートは、「私にはあなたの痛みがよくわかります」というように、自分と他者が隔絶しておらず、世界との境界線が曖昧であるような世界観を前提にしているからである。痛み随伴性サポートでは、支援する者は安全な世界の側におり、支援される側の世界との隔絶性に脳天気な気づかないのであるから、支援に効果がないのも推して知るべしである。当事者も支援者も世界との隔絶を前提にすること、その上で、支援者が当事者の幸せを祈ること、それが新たな生活に踏み出す一歩になるとされる。

それらの喪失を認め、受け入れることは、新たな生活に向かうために必要だが、けっしてたやすくはない。けれども、幸せを心から祈ってくれる「だれか」がいれば、被害者自身も幸せになりたいと願い続ける勇気、なれるかもしれないという希望を取り戻すことができる⁴³。

最後にもう一度〈祈り〉が何であるかについて確認しておこう。それは、他者との隔絶を前提にしつつも他者を見放さず、場合によっては社会的サポートをすること、すなわち接触型でも非接触型でもなく、他者との距離を保ちつつ、他者の幸せを念じることである。ところで、われわれの当初の問題は、ポストコロナにおける接触と非接触のオルタナティブであった。ここまでの考察で、〈祈り〉が、接触にも非接触にも回収されない、接触と非接触のオルタナティブであることがわかった。次章では、ひとつのアレゴリーを用いて、〈祈り〉について具体的に見ていこう。それはポール・オースター『ガラスの街』である。『ガラスの街』が、世界との隔絶を前提にしつつ他者の幸せを祈る物語であるからである。

4. アレゴリーとしてのポール・オースター『ガラスの街』

(1) クイン(の隔絶)の反復としての登場人物たち

『ガラスの街』の主人公ダニエル・クインは35歳であり、ミステリー作家を生業としている。過去に妻と息子がいたが、今ではもう二人とも亡くなっていることが物語の序盤で示唆される。最愛の者を亡くしたことは、クインの人生に大きな影響を与えた。妻と息子

の存命中は、野心的に詩集・戯曲・文芸評論を執筆し、大部の翻訳も出版したが、そうした一切のことを妻子の死をきっかけにやめてしまった。その理由をクインは次のように説明する。「僕のなかのある部分が死んだんだ、そいつがまた戻ってきて僕にとり憑くなんて御免だね、と彼は友人たちに語った⁴⁴。」また、次のような感慨も述べている。

あたかも自分が自分の死を生き延びたような、死後の生を生きているような、そんな感じがした⁴⁵。

「自分の死を生き延びた」や「死後の生を生きている」とは、どういう意味か。それは、クインは、妻と息子を喪ったときに、精神的に破綻し、そこで自分は死んだも同然であり、その後の生は生ける屍であり、空疎で何の意味もない無駄で余分な生だ、という意味であろう⁴⁶。

ところが、クインは自分が死んだことを直視せず、自分の死をごまかした。自分の死をごまかす手段が探偵小説であった。彼は探偵小説を執筆することによって自分が死んでいることを取り繕った。どうして探偵小説なのか。探偵とは、その一挙手一投足に無駄がひとつもないような存在、すべての挙動が物語の意味を満たすような存在だからである⁴⁷。それらはすべてクインにないものである。彼の世界はもはや意味で満たされない余分な世界であり、物語にならない生である。そこで、クインは自分が執筆するミステリーの探偵ワークに「なったふりをする事」⁴⁸を通して、自分がすでに死んでいることをごまかしたのである。

クインに取り憑いたものは、これまでそばにいて日常的に触れ合っていた愛する者の喪失（感）である。クインの状況は、程度の差こそあれ、コロナ下のわれわれの状況とよく似ている。現在、われわれも会おうと思えばいつでも会えた親しい人（離れて暮らす親類や友人）と、簡単には会えない状況にある⁴⁹。多くの人が愛する人との接触を喪失し、隔てられているのである。『ガラスの街』がわれわれの状況の寓意になるのは、それが絶対的な隔絶、徹底的な非接触を描いているからである。クインの日常は、外部との接触を避け、隔離状態にある。その隔離は最愛の妻と息子を失ったことに起因する。

息子の遺体を収めた小さな棺のことを、葬儀の日になんか地中に下ろされるのを見たときのことをクインは考えた。あれこそ掛け値なしに隔離だった、と彼は胸のうちで思った⁵⁰。

ここで、『ガラスの街』のあらすじを簡単に述べて

おこう。クインに間違い電話がかかってきて、そこで彼は「ポール・オースター」という探偵に間違われる。間違い電話の主は、ヴァージニア・スティルマンであり、依頼は夫ピーター・スティルマンをその父から守ってほしいというものであった。父は息子を12歳になるまで9年間監禁し、精神異常で病院に収容される。父は13年間の収容期間を終えて息子を殺しに来るといっているのである。

読み進んでいくと、あることに気づくことになる。登場人物はそのほとんどが、クイン（の隔絶）の反復であるということに、である。つまり、それぞれの登場人物は愛する者と隔絶しているである。

まず、ピーターの父であるスティルマン。クインと同様、スティルマンには妻と息子がいたが、息子ピーターが2歳の時に妻を——おそらく自殺で——喪っている。一方、スティルマンは、クインとは異なり、息子のピーターを喪っていないが、父は息子をその後9年間監禁するのであるから、父と息子は隔絶しており、関係性が失われている点では、クインと似ている。

次に息子のピーター・スティルマン。彼は父から監禁され、9年間、自分の汚物にまみれた部屋に隔離されることになる。父に時折殴られる以外はいっさい人との接触が断たれた。ピーターがクインの反復であるということは、次のような箇所からわかる。「僕の名前はピーター・スティルマン。それは僕の本当の名前ではありません」とピーターは述べ、クインはその反復として、「僕の名前はポール・オースター。それは僕の本当の名前ではありません」と述べている⁵¹。また、ピーターの妻、ヴァージニア・スティルマンも夫と隔絶している。妻は夫とセックスレスであり、夫は妻が買った娼婦と性交渉をしている⁵²。

また、クインが間違い電話で間違われた名前の主であるポール・オースターは妻と息子を失う以前のクインの反復であると考えればよいであろう。クインは、ポール・オースターが妻と息子と幸せに暮らしているところをたまたま垣間見るのである。

そのほんのわずかの瞬間に、俺はもう駄目だ、とクインは思い知った。[……] あんまりだと思った。何だかまるで、自分が失ったものをオースターに見せつけられているような、オースターにからかわれているような気がした⁵³。

このように、物語における種々の反復は、世界との隔絶をクインに意識させ、自分がすでに死んでおり、それをごまかしていたことをクインに気づかせるはたらきをもっているのである。

(2) 反復によって自分が死んでいることに気づく

とはいえ、どうしてクインは、自分の妻子の死によっては自分自身もそれをもって死んでしまったことに気づかず、オースターの妻子を見ることによって、自分が死んでいることに気づいたのであろう。なぜなら、出来事は1度起こっただけでは現実に至らず、反復することによって現実化するからである。マルクスは、『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』の冒頭で、ヘーゲルに託して、世界史的な出来事がすべて2度出現すると述べている⁵⁴。マルクスが参照しているのは、おそらく、ヘーゲル『歴史哲学講義』の次の箇所である。

最初は単なる偶然ないし可能性と置いていたことが、くりかえされることによって、たしかな現実となるのです⁵⁵。

ヘーゲルが述べているのは、理性の狡知という歴史的必然性についてである。すなわち、カエサルが独裁者となり共和制を否定したのは、単なる一個人がなした偶然的な出来事ではなく、「ローマ史と世界史の必然的な方向をしめすもの」であった⁵⁶。その証拠に、共和制を再興させるためにブルトゥスとカシウスが共謀してカエサルを殺害したことが、かえって共和制崩壊の引き金になり、その結果初代の皇帝アウグストゥスが生まれた。ローマの共和制は形骸化し、もはや死んでいたが、当のローマ人はそのことに気づいていないのである。ジジエクによれば、これはフロイトの、自分がすでに死んでいることを知らない父親の夢の言い換えである⁵⁷。すなわち、「父は生前のように元気でいて、平常と変わらず彼と話をした。しかし(ここがおもしろいところだが)父はじつは死んでいるのであって、ただそれに気づいていないだけなのだ」と⁵⁸。われわれが死んでいることに気づくのは、死んでいるという事実が反復されることによってであるのだ。

(3) 護りたい人から隔てられ、それでも見守る

『ガラスの街』から得られる教訓は何か。それは、本稿でも繰り返し述べてきた、接触の不可能性における接触の可能性である。どうということか。物語の終局でクインについて次のように語られる。

自分の誕生の瞬間を彼は思い出し、母親の子宮からそっと引き出されたさまを思い出した。世界の無限の優しさを彼は思い出し、これまで自分が愛した人々一人ひとりの優しさを思い出した⁵⁹。

われわれの誕生は、子宮という絶対的な安全基地からの離隔、世界からの絶対的な離隔、つまり接触の不可能性を意味する。ここで、人間の赤ちゃんが仰向け寝ができることによって、母親から絶対的に隔絶していることを想起しよう。が、しかし、この離隔によって、われわれは他者と関係を取り結ぶのである。つまり、接触の可能性は、接触の不可能性にこそ孕まれているのである。

クインは最終的に、スティルマン夫妻と連絡が全然取れなくなったが、それでクインが何をするかと言えば、スティルマン夫妻とは連絡が取れない(=隔絶している)のに、それでもクインはピーターを数ヶ月路上から見守る(=祈る)ことになる。

クインの仕事はピーターを護ること、ピーターに危害が及ばぬようにすることである⁶⁰。

新型コロナウイルス感染症により全世界で亡くなった人は、現時点(2021年9月15日)で、464万7735人である⁶¹。また、本稿で述べたとおり、パンデミックの影響により、DVや児童虐待、女性の自殺者、子どものうつ症状が増加している。理不尽な暴力により、世界との隔絶を経験した人に対して、われわれはその人にそれ以上の危害が加えられないように、かれらを護らねばならないのである。その人たちは世界から隔絶しているから、かれらを護る技法は〈祈り〉である。

おわりに

新型コロナウイルス感染拡大により社会的距離の確保が要請される中で、人間関係はどのように変化するのか、あるいはまた変化しないのか、という問題について考察してきた。とくに、接触と非接触のいずれかの二者択一ではなく、それらのオルタナティブの可能性を模索してきた。それぞれの章で論じたことを最後にふりかえりたい。

まず第1章では、感染症の拡大により最も影響を受けるのは子どもや女性であることを様々なデータで示した。コロナ下では家族内は過密の状態になり、家族外は逆に過疎状態になり、依存先が失われるということであった。接触の回復として愛着理論を取り上げたが、愛着理論では、コロナ下で増加する児童虐待やDVに効果がないばかりか、愛着理論がさまざまな問題の元凶であることを見た。次に、聖書における「我に触れるな」という言葉を足がかりに、問題の困難さについて考察している。ポストコロナでは、愛するために接触するという通常の愛し方とは正反対のふるま

い方が求められる。愛するために接触しないというふるまい方が、である。しかし、そのような生活様式はディストピアでもあるから、ポストコロナでは、接触でもなく非接触でもない第三の選択肢が求められるわけである。そこで、別の選択肢を考えるヒントとなるのが、鶴見の「ディスコミュニケーション」である。ここでは、コミュニケーションの不可能性（＝ディスコミュニケーション）が高次のコミュニケーションを可能にすることを明らかにした。第3章では、接触でも非接触でもない第三のふるまい方の具体例として、ダルクの支援、宮地の〈祈り〉について言及した。そのいずれも、接触型でも非接触型でもなく、他者との距離を保ちつつ（＝非接触）、他者の幸せを念じること（＝接触）であるとされた。最後に、ポール・オースター『ガラスの街』をアレゴリーとして取り上げ、接触と非接触とのオルタナティブの可能性を探究した。接触と非接触のオルタナティブとは、接触の不可能性における接触の可能性、無能な者による祈り、世界との隔絶を前提にしつつ大切な人を見守ることであった。

周知のように、道德教育の目標は、「自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」である⁶²。ポストコロナは、他者と共によりよく生きることについての再考を迫る。なぜなら、その他者は世界と隔絶している他者、共感することが困難である他者であるかもしれないからだ。コロナ下において、「自己と他者との心の絆」⁶³、「互いが深い絆で結ばれている」家族⁶⁴、義務を果たすことによって守られるべき「他者との絆」⁶⁵の可能性と不可能性を考えることが、今後の人類的な課題である。

註

- 1 首相官邸ホームページ「新型コロナウイルス感染症対策」参照。 <https://www.kantei.go.jp/jp/headline/kansensho/coronavirus.html>
- 2 読売新聞オンライン「児童虐待通告が初の10万人超え、DVも過去最多…外出自粛が一因か」、2021年2月4日。 <https://www.yomiuri.co.jp/national/20210204-OYT1T50134/>
- 3 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』、教育出版、2018年、52頁。
- 4 文部科学省『生徒指導要領』、教育図書、2011年、21頁。
- 5 「英イングランド公衆衛生庁（PHE）の予防接種責任者、メアリー・ラムジー博士は21日、世界各国で新型コロナウイルスワクチンの接種が完了するまでは、イギリスではマスク着用や社会的距離の確保といった基本的な感染防止措置が続く可能性があるとの見解を示した。日常生活に戻るまでにあと数年はかかるとしている。」BBC News Japan、2021年3月22日、 <https://www.bbc.com/japanese/56473388>
- 6 内閣府男女共同参画局「コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会 報告書」、2021年4月28日、4頁参照。 https://www.gender.go.jp/kaigi/kento/covid-19/siryo/pdf/post_honbun.pdf
- 7 同報告、3頁。
- 8 同報告、4頁参照。
- 9 同報告、21頁参照。
- 10 同報告、22頁参照。
- 11 警察庁長官官房『令和2年の犯罪情勢』、2021年、15-16頁参照。もっとも、これがコロナ禍の影響であるかどうかははっきりしない。通告児童数および検挙件数はここ数年ずっと増加傾向にあるからだ。
- 12 国立成育医療研究センター「コロナ×子どもアンケート第4回調査報告書」、2021年2月10日、78頁参照。 http://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/CxC4_finalrepo_20210210.pdf
- 13 たとえば、以下の論文を参照。濱田誠二郎「コロナ自粛における子どもや保護者への影響を、愛着の視点から考察する」、『神戸海星女子学院大学研究紀要』、59号、2021年、所収。
- 14 下司晶「J・ボウルビイにおける愛着理論の誕生——自然科学と精神分析——」、教育思想史学会『近代教育フォーラム』、2006年、203頁参照。
- 15 内閣府男女共同参画局、前掲報告書、31-32頁参照。
- 16 スラヴォイ・ジジエック『パンデミック——世界をゆるがした新型コロナウイルス』、P ヴァイン、2020年、5頁参照。
- 17 同書、同頁。
- 18 同書、6頁。
- 19 大澤真幸『コロナ時代の哲学』、左右社、14頁参照。
- 20 同書、15頁。
- 21 同書、15-16頁参照。
- 22 松沢哲郎『想像するちから——チンパンジーが教えてくれた人間の心』、岩波書店、2011年、53頁参照。
- 23 大澤真幸『動物的／人間的——1. 社会の起源』、弘文堂、135頁参照。
- 24 大澤、同書、132頁。
- 25 鶴見俊輔『鶴見俊輔集2——先行者たち』、筑摩書房、1991年、258頁。
- 26 最果夕ヒ『きみの言い訳は最高の芸術』、河出文庫、2019年、101頁参照。なお、最果は、「言葉によって切り捨てられてきたもの」を詩ですくいだせると信じていると述べる。
- 27 鶴見、前掲書、279-280頁。
- 28 熊谷晋一郎『ひとりでも苦しめないための「痛みの哲学」』、2013年、青土社、36頁。
- 29 同書、19頁参照。
- 30 同書、30-31頁参照。
- 31 上岡陽江、大嶋栄子『その後の不自由——「嵐」のあとを生きる人たち』、医学書院、2010年、33頁。

- ³² 同書, 18 頁参照.
- ³³ 同書, 24-26 頁参照.
- ³⁴ 同書, 27 頁参照.
- ³⁵ 同書, 25-26 頁参照.
- ³⁶ 同書, 27-28 頁参照.
- ³⁷ 同書, 244 頁.
- ³⁸ 同書, 85 頁.
- ³⁹ 宮地尚子『傷を愛せるか』, 大月書店, 2010 年, 45-46 頁.
- ⁴⁰ 同書, 12 頁.
- ⁴¹ 同書, 12-13 頁. 宮地はここで, 英語の witness が目撃者であると同時に証人でもあることを指摘している.
- ⁴² 同書, 46 頁.
- ⁴³ 同書, 同頁.
- ⁴⁴ ポール・オースター『ガラスの街』, 新潮文庫, 2013 年, 7 頁.
- ⁴⁵ 同書, 9 頁.
- ⁴⁶ クインがすでに死んでいたことについては, 都甲幸治による書評を参考にした. 都甲幸治「オンラインのつながりで…思い込みが開けた」, 『好書好日』(2021 年 4 月 14 日). <https://book.asahi.com/article/14328984>
- ⁴⁷ オースター, 前掲書, 14 頁参照.
- ⁴⁸ 同書, 16 頁.
- ⁴⁹ 2021 年 9 月 1 日現在, 筆者の住む熊本県では「まん延防止等重点措置」が適用され, 全ての県外への不要不急の移動を控えなくてはならない. 現在, 緊急事態宣言の実施区域が 21 都道府県, まん延防止の実施区域が 12 県である.
- ⁵⁰ オースター, 前掲書, 67 頁.
- ⁵¹ 同書, 43 頁および 76 頁. なお, 名前とその名前で名付けられた者, シニフィアンとシニフィエの一致と不一致についての考察は興味深いテーマであるが, それはまた別の機会に譲りたい.
- ⁵² 同書, 40-41 頁参照.
- ⁵³ 同書, 186 頁.
- ⁵⁴ カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日 [初版]』植村邦彦訳, 柄谷行人付論, 平凡社ライブラリー, 2008 年, 15 頁参照.
- ⁵⁵ ヘーゲル『歴史哲学講義 (下)』, 岩波文庫, 1994 年, 151 頁.
- ⁵⁶ ヘーゲル『歴史哲学講義 (上)』, 岩波文庫, 1994 年, 58 頁.
- ⁵⁷ ジジエク『イデオロギーの崇高な対象』, 河出文庫, 2015 年, 116-118 頁.
- ⁵⁸ ジークムント・フロイト『夢判断 (下)』, 新潮文庫, 2005 年改版, 203 頁.
- ⁵⁹ オースター, 前掲書, 236 頁.
- ⁶⁰ 同書, 203 頁.
- ⁶¹ COVID-19 Dashboard by the Center for Systems Science and Engineering (CSSE) at Johns Hopkins University (JHU).
- ⁶² 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』および『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』, 第 1 章総則の第 1 の 2 の (2).
- ⁶³ 文部科学省, 2018, 37 頁.
- ⁶⁴ 同書, 52 頁.
- ⁶⁵ 同書, 68 頁.